漸進性の魅力と公民館の活用によるマラソン振興の研究

金沢星稜大学佐々木ゼミナールB
○沼田 夢菜　水上 龍之介　武内 寛樹　小澤 風雅　大下 和弥

1　はじめに

⑴緒言

近年、大都市群ではマラソンがメジャーなスポーツとして注目され、多くの大会が開催されている。その背景として、東京マラソン等を契機としたマラソンブームによるマラソン人口の増加やマラソン開催による経済効果への期待がある。また、参加者が高度な技術を必要とせず、参加可能人数が膨大であるのもマラソンの魅力だ。その結果、多くの自治体がマラソンを通じて、その地域の特産物、歴史的景観などの魅力を参加者に提供するようになった。それに伴い、マラソンのエンターテインメント化が進んだ。しかし、マラソン大会の実施による経済効果は期間限定的であるため、継続的に実施することで、初めて大きな効果をもたらすと考えられる。継続的なマラソン開催のためには、地域が一丸となって積極的にボランティア参加を行える大会を作ることが大切である。そのためには、地元住民も楽しいと感じる大会でないと長続きはしない。継続的な参加を促すには、参加者に対して心温まるおもてなしをすることが必要だと考える。

マラソンのエンターテインメント性を担うのは地域性である。マラソンによる地域性とは食事、景観、人的活動の 3 つのことを指し、大きな魅力と認知されている。伝統や建造物は漸進的なものではなく、食事と景観は短期間に変更できるものではない。人的活動のうち、地域住民とのつながり、これもまた不変性の魅力である。しかし、ランナーと地域住民との交流を深めるような活動は漸進的なものとなり、不変的でありながら常に新しい魅力を提供することができる。漸進的な魅力が今後の地域マラソンの継続に必要なのではないだろうか。

⑵研究の目的

筆者の地元である金沢を、まるごと「走る！」をテーマにして地域性の魅力を引き出し、エンターテインメント性を含んだ第一回金沢マラソンだが、様々な意見が噴出した。晩秋での防寒の問題や、交通網の完全把握ができていなかった等の指摘があった。そこで、第二回では昨年のアンケート結果から幾つかの改善を施した。交通規制開始とスタート時間を 10 分早める、ペアエントリー制度導入、石川県民枠（1000 人）設置、開催時期の繰り上げを行った。しかし、以上の要点を改善したにも関わらず、今年度は応募が減少した。昨年度の 32000 人に対し、28800 人となるおよそ 4000 人の減少である。初回という付加価値が大きかったとするならば、減少した約 4000 人は第一回を既に走っている者だと考えられる。つまり、第二回ではリピーターの獲得に失敗していると予測できる。その理由としては、「不変的な魅力」に依存していたことがあげられる。そこで本研究では、人的交流活動などの「漸進的な魅力」により興味を惹くにはどのような活動が必要であるか検討することを目的と

する。

2. 研究の方法

⑴調査対象者

ヒアリングを実施した有識者等は以下の 2 名である。

ア. A 氏（金沢マラソン組織委員会事務局）

イ. B 氏（金沢市公民館連合会）

⑵調査日時

ア.2016 年 7 月 28 日

イ. 2016 年 9 月 15 日

⑶調査の手続き

調査対象者から研究協力への同意を得た後に、事前に質問内容を伝達したうえで取材当日に配布された資料をもとにヒアリング調査を行った。

⑷質問項目の概要

ア. ①地域ボランティアについてどう考えているか、②ボランティアの募集先、③初回大会の反省を通して改善・工夫を行った点

イ. ①金沢方式について、②公民館の役割、③公民館の役割運営

3.結果

金沢マラソン組織委員会事務局の A 氏に対するヒアリング調査により、金沢マラソンは金沢市公民館連合会、町会連合会、金沢市校下婦人会の 3 団体が沿道ボランティアへの大きな動員を促したことが明らかとなった。その理由を探るべく、金沢市公民館連合会の B 氏にこれらの団体の地域との関係性について調査したところ、金沢方式という金沢市に根付く独自のシステムにより、公民館の役割が地域性のつながりを強くする鍵となっている。金沢市独自の公民館の運営方法について、以下に記す。

金沢市の地区公民館は、中学区にひとつの単位で設置されている他県に対して、各小学校区にひとつずつ作られまた、現在市内に 60 の公民館が設置されている。その『金沢方式』には、主に 3 つの特色があげられる。1 つ目に地域主導である。公民館施設の維持管理、役職員選任など公民館の運営については、地域に委託している。公民館の館長を始めとする職員は、他の市町村で見られるような行政の職員ではなく、地元が館長を選び、その館長が公民館主事を始め、各職員を選ぶという独特の方法を行っている。2 つ目に、ボランティアで運営しているということである。金沢の公民館では、有給の主事、事務員を除き、館長、役職員は無報酬である。さらに、金沢独特の公民館委員会がボランティアとして、各町会内で公民館活動の地域への浸透を図る役割を果たしている。3 つ目に、地元負担ということである。運営費や施設の整備費の一定割合は、地元負担によってまかなわれている。（運営費 4 分の 1・施設の整備費 3 分の 1）

4.考察

本研究では金沢マラソンにおける沿道ボランティアの活用により、減少したリピーターの保持増進に貢献する対策について研究を行い、以下のように考える。

漸進的な活動を、コースに隣接する複数の公民館で行うことで、大規模であればそれぞれの管理が必要なため質を落とさなければいけないが、大規模でありながらそれぞれが引けを取らない魅力の元に実現すると考えられる。

地域のつながりを前面に出していく際、人が不変的でありながら活動を漸進的なものとすることにより、物的なものより効果を発揮するのではないかと考えられる。

金沢市独自の地域主導での公民館運営を行うことにより、活動の幅が広がるため、より多くの種類のもてなしが可能になり、新たな沿道ボランティアの在り方として目玉スポットと位置づけられることが考えられる。

「金沢マラソン 2015」調査結果より、参加ランナーの主な目的が金沢や歴史文化への魅力と述べた割合が 63%であった。減少した数に対しても有効であるならば、4000 人に対し 2520 人が継続して参加してくれると考えられる。

5.まとめ

本研究では金沢マラソンにおける沿道ボランティアの活用により、地域住民の協力のもと、漸進的な地域性を利用した公民館の協力による大規模なリピーター保持増進に貢献する対策について研究を行った。今回の研究について以下にまとめる。

(1). 地域性の 3 つの内、人的活動が最も漸進性に富んでいるため、沿道ボランティア内のチームや団体の細かな配置、運用頻度がリピーターの増減に影響が少なからずある。

(2).公民館の活動頻度が高く、金沢マラソン当日であっても滞りなく作業を進行できるノウハウを地域住民が得ている。

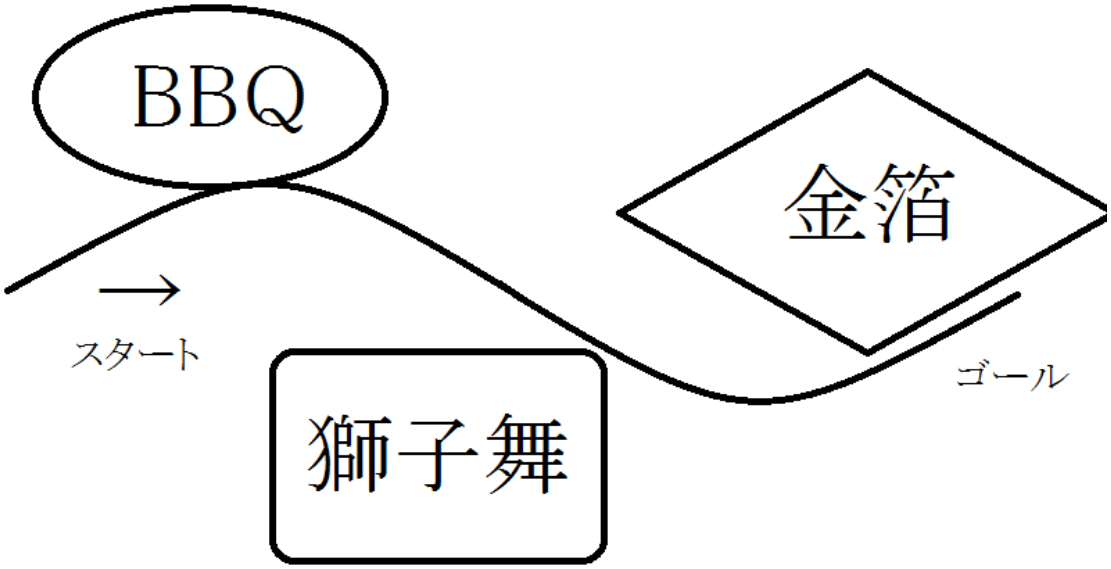
(3). 他地域と異なった特殊な公民館の運営により、その浸透度も広く、協力的な地域住民がより多く存在すること。

6.提言

漸進性の活用は鹿児島マラソンの事例もあり、多くのマラソンで行うことが可能である。本研究でより効果的に行うめどがついたのは、公民館の金沢方式によるものではないかと提案する。

加えて金沢マラソンでは金沢方式を利用することにより沿道ボランティアの募集を行った。本研究ではそれに加えて公民館を活用することにより、多数の目玉スポットを設置し公民館としての在り方について新たな提案を促す(図 1)。地域住民の同意や設置の条件などの困難があるが、このことにより金沢マラソンがより一層「金沢らしさ」を強化し、他のマラソンの独自性による競争性を生むと考えられている。

図１　それぞれの公民館での交流スポット案予定



7.参考文献

一般財団法人東京マラソン財団 ボランティアセンター 東京マラソン（2017）【ボランティア募集人数】http://www.marathon.tokyo/volunteer/about/、（参照日）

京都マラソン実行委員会事務局　京都マラソン（2017）【ボランティア募集要項】http://www.kyoto-marathon.com/volunteer/、（参照日）

神奈川新聞社 横浜マラソン（2016）【ボランティア募集人数】http://www.kanaloco.jp/company/outline/、（参照日）

国立国会図書館 レファンス協同データベース【市民のマラソンへの関心（抜粋）】http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000153055